

おわりに

「冬芽」を「芽」としてだけでなく開芽後のシュートの展開を含めて広く捉えたいという、編者の目論見にほぼ近い内容に仕上がったと自負している。ひとえに、執筆をお引き受け頂いた著者の方々のおかげである。

竹類、草本類をはじめ、冬芽を形成しない藻類、菌類に至るまで、それらの越冬状態の一端をも紹介して頂けた。従来「冬芽」関連の書物では、おそらく扱われることのなかった熱帯樹木までとり込み、大風呂敷を広げた結果、やや、焦点が絞りが切れていないという批判を受けるかもしれない。これはすべて編者の責任であり、至らなさの所為である。そのかわり、これまでとかなり異なる視点から、「冬芽」を見直して頂くきっかけを提示できたかと思う。

一般に冬芽は「裸芽」または「鱗芽」を指すと認識されてきたが、近年もう一つの冬芽として「苞芽」の概念が示されている (Nitta & Ohsawa, 1998 など)。提唱者のお一人である大澤雅彦先生には、その紹介をお引き受け頂けた。

本書にとって重要な位置を占める、花芽形成に関する遺伝子の情報や、休眠の制御機構の問題など現時点における最新の情報が盛り込まれ、針葉樹の冬芽の検討結果も示して頂けた。

また、冬芽の形態に系統を絡めた研究成果や、開芽後のさまざまなシュートが展開する具体的な動きについても詳しく紹介しただけだ。これらは「冬芽」をキーワードに、その展開後をも含めて広く把握したいという、本書の主たる狙いであった。

なお、最後の4篇では、樹形研究会のメンバーに登場願った。皆さんは毎年数種ずつ数年間にわたる樹木の生活史 (フェノロジー) の通年観察を進めて来られ、今回はその一端の紹介にすぎない。調査や研究はプロばかりのものでないという編者の見解の具現でもある。

ともあれ、薄学の身には荷が重すぎると一旦お断りしたにも拘わらず、本

書の編集を委ねられた北隆館編集部の方々に感謝いたします。また日ごろ助力いただいている樹形研究会の平岡 博，鈴木順子，小林重雄の方々にこの場を借りてお礼申し上げます。

2014年11月

八田 洋章